Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-05-02

「唐大和上東征伝」の世界

蔵中, 進

(Citation)
国文神戸,2:1-14

(Issue Date)
1972-06

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100481953

「唐大和上東征伝」の世界

蔵中進

奈良・西京の松林のなかに、雄大な鴟尾をはね上げている重厚な大屋根を、しっかりと支えて並ぶエンタシスの柱列――いうまでもなく唐招提寺金堂である。それは、同じ西京の名刹薬師寺三重塔の軽やかなたたずまいと、全く好対照をなすものといえるであろう。薬師寺三重塔が、壬申の乱後の専制君主、天武、持統夫妻の愛情の結晶として今日に遺るものとすれば、唐招提寺金堂は、万里の波濤を凌ぎ、前後十一年の歳月を費してやっと六度目の渡海に成功して、伝戒の使命を果した唐僧鑑真の偉大なる記念碑と称していいであろう。われわれは、今日その鑑真の渡海の苦心を、真人元開(淡海三船)の残した「唐大和上東征伝」一巻（以下「東征伝」と称する）によって、かなり詳細に知ることができるのである。

本稿は、その「東征伝」について考察しようとするもので、数少ないわが奈良朝の文学遺品のなかにあって、それがいかなる位置を占めるものであるか、また、その、当代にあってはむしろ希有とも思えるほど雄大な構想と内容は、なににもとづくものであるか、等等の問題を検討してみようとするものであり、従来から文学作品としてかえりみられることの少なかった「東征伝」を、文学の場に引き出して、いささかでも正当な評価と位置とを与えてみようと思うものである。

永積安明先生の御近業の一つに、南海の沖縄文学の御研究があり、瞠目すべき御論考を続々と発表されていることについては、周知の通りである。鑑真一行の南海大漂流をクライマックスとし、第六次の渡海でやっと一行がたどりついた最初の島は「東征伝」に「第一第二両舟、同到阿児奈波島」々在」多禰島南西」」とあって、沖縄島であった。いささかなりとも、先生の御近業に因みありと考え、拙い私見を記して、多大な学恩を賜った先生の鴻恩に報謝したいと念願するものである。

一

北京大学の歴史学者向達氏は、「東征伝」について、

『東征伝』の文章は簡潔にして生き生きしており、唐人の風

格充分で、伝記文学におけるすぐれた作品である。東征伝は鑑真大師の伝記であると同時に、その豊富な記載内容によって、八世紀前半の唐代歴史研究上の重要史籍ともなっている。この本に描かれている期間は天宝二載から天宝十二載にいたるわずか十年間の出来事にすぎないが、北は揚州から南は海南島にいたるまで、嶺南から揚州に帰る際、庾嶺を経て、贛江・長江の流れに沿って南下したことまで記してある。伝には多くの見聞が記されているが、いずれも重要な史料である。

と述べ、(1)これを「伝記文学におけるすぐれた作品」と認めつつも、同時に「唐代歴史研究上の重要史籍」であり「史料」であることを強調された。

わが国の研究者にあっては、例えば宮川寅雄氏は、

『東征伝』とても、稀有の古典ではあるが、僧伝の域にとどまるものであり、思託でも、三船でも、われわれにとって価値あるべき事実は、かれらにとっては、避くべきもののように取り扱われている。

と述べておられる(2)。

「東征伝」に対しては、このように、従来から、概して奈良仏教史の一史料、あるいは僧伝という観点からの評価が行なわれてきた。

果して、「東征伝」は、僧伝の域にとどまるにすぎないものであろうか。

いまは、まず「(高)僧伝」、あるいは一般にいうところの「伝記」の世界に本書を据えて、その性格や本質を考察してみることから、手をつけてみようと思う。

わが六国史のうち、「続紀」以下の五史は、王臣・僧侶などの死歿記事を掲げた時、その人物の伝記を掲げることが多く、一般には「薨卒伝」と称されている。その伝は、概して「あらかじめ書かれてある伝記を材料とし、参考として用いたもののあることを知ることができ」、「国史の撰択の見識によって、既存の伝記そのままのものを載せるということはなく」て、「適当な修正を行なっていること」が明らかにされている(4)。

奈良朝以来、国史のいわゆる薨卒伝の材料となった伝記は、相当の量に上るものがあったと思しく、それらのうち、よく散逸をまぬがれたものが、今日、「家伝」のごとき単行の伝や、あるいは「懐風藻」や「延暦僧録」などのなかの伝記として、残ることを得たものであろう。

「東征伝」は、たしかに鑑真の伝記である。特に、その冒頭部の形式は、今日われわれが手にすることのできる、多くのわが国の「漢文伝」や、中国史書の「列伝」の部における多数の伝や、同じく中国やわが国の「高僧伝」の体裁と、ほとんど一致する。

一般に「伝記」の形式は、中国の場合もわが国の場合も、

① 氏姓名諱字
② 出自 (父・祖父など)
③ 略歴 (官歴・学統など)
④ 性情・行実・功績・徳行・逸事
⑤ 薨卒時年齢

を基本として、各人物により、各項目の変動増減が行なわれている。

右のうち、特に④の性情・行実・逸事などは、被伝者の実際にも

よるが、伝記撰者の被伝者評価と文才次第で相当程度の増減・脚色・創作などの行なわれる余地を残している部分である。実は「伝記」が事実そのままの伝記からはなれて、森鴎外のいわゆる「歴史離れ」をして、「史伝」「歴史小説」「伝奇小説」に転化するのは、この部分にふくらみをもたせて、創作的手腕をふるうかふるわないかにかかっている、といっていいであろう。

ひるがえって、わが上代における伝のあり方に一瞥を与えてみよう。

坂本太郎博士によると、「続紀」における伝記記事の総件数は一四二篇であるという。文武元年（697）～桓武十年（791）の約一〇〇年間に、正史に収載された伝記の数としては、極めて少ないというべきであろう(7)。この一四二篇の中には、例えば藤原仲麻呂や釈道昭などの場合のごとく、かなり長大で、かつ相当に脚色された痕跡をうかがうことができるものもあるが、一般にはごくあっさりと前述の項目にしたがって記述され、④の性情・行実・逸事などについては、むしろほとんど見るべきものがない、といった方がよいように見うけられる。おそらく、各被伝者に関する原資料には、④の項目に該当する記事が、もっと多彩に含まれていたものであろうが、官撰の史書中に収録するために、その多くは削修されたものと思われ、むしろ当然の処置であったということができる。

「懐風藻」にも、周知のように、大友・河島・大津皇子・釈道慈・釈道融・石上乙麻呂の九人の伝が収められている。しかし、これらはさきの「続紀」薨卒伝のごとく形式的なものではなく、濃淡の差こそあれ、被伝者の性情・行実・逸事などを、かなりな程度に浮き彫りにしていて、その上に、伝記撰者の何がしかの感慨を述べているもので、伝というよりはむしろ後代のいわゆる「歌がたり」の先蹤をなすもの、とも称した方がふさわしいように思われるものがある。

天平宝字のころの撰と考えられる「家伝」二巻も、別に「大織冠伝」とも異称されるように、藤原鎌足およびその子貞恵（上巻）と武智麻呂（下巻）の伝を収めているが、比較的短章であるにかかわらず、被伝者の性情・行実・逸事などに多くの筆を費して、平板な年代記的伝記からの脱出を試みているように見うけられる。

以上にあげられた以外にも、われわれは奈良朝文学遺品のなかに幾篇かの「伝記」と称するものを捨うことができるが、概していうと、それらは「続紀」中に見える薨卒伝の形式に近く、いわばこの形式が当代における伝記の一つのパターンであったといって過言ではない。これらのうちに、被伝者の性情・行実・逸事の類を織り込む余地があるとき、また伝記撰者がそれを行なったとき、その寡多によって、「伝記」はまさに「伝記離れ」して、物語性をふくらませ、遂には「伝」とは称しつつも、本来の伝からは遠くへだたった、いわゆる「伝奇」の分野に踏み込んだ作品となったものと思われる。具体的にそれらの作品を奈良朝の遺品のなかから示せば、「水江浦島子伝」や、今日ではその片鱗しかうかがうことのできない「柘枝伝」などは、まさにそれに該当するものということができるであろう。

かくて、わが上代における伝は、「続紀」中の后妃・功臣・寵臣

・武将・能吏・酷吏・高僧等々の、いわゆる薨卒伝を最右翼におき、「水江浦島子伝」のごとき、すでに伝の世界からは遠くへだたって「伝奇」とも称すべき世界のものを最左翼において、これらの中間に多くの伝が配列される、と見るべきであろう。

そして、いま本稿にとり上げようとする「東征伝」もまた、この中間に位置するものであるが、私はむしろ「水江浦島子伝」などの世界により接近して位置するもの、と考えるものである。それは、「続紀」淳仁天平宝字七年五月戊申（六日）の条の、「大和上鑑真物化」に続けて記載された鑑真のいわゆる薨卒伝と、「東征伝」とを比較すればよくわかることで、「続紀」の伝は、いかにも正史中の薨卒伝の一篇というにふさわしく、無駄を極力省いて最少限の必要事項のみに止めて、約三四〇字の短章にまとめられているが、「東征伝」は全一巻約九五〇〇字に及ぶ長篇の伝となっていることからも、容易に推測することができるであろう。

二

「東征伝」を、単なる鑑真の伝記たるのみに止めず、より多くの伝奇的物語性を加え、鑑真東征の由来、道中苦心の顚末記として構想し、今日見るごとき体裁と内容にまとめ上げたものは、一体何であったのだろうか。

勿論、何よりもその根本にあって、「東征伝」をしっかりと支えているものは、鑑真自身の不抜の精神と、卓越した人格の力によるものであろうが、同時に、それ以上に強力な支えとなっているのは、撰述者のすぐれた構想力と筆力とであったといわねばなるまい。私はかつて、現存「東征伝」は鑑真に従って来日した弟子の思託の手になる三巻本「広伝」をもとにして、真人元開（淡海三船）が一巻本の「東征伝」に節略・改修して成ったものであることについて論じたことがある(8)。元開は鑑真とは因縁浅からぬ関係にある人物であり(9)、また当代における「文人之首」（「続記」天応元年六月辛亥（二十四日）石上宅嗣薨伝）とも称された文豪であった。今日見るごとき「東征伝」の文章は、その多くを元開に負うものというべきであるが、彼の目的――思託から委嘱された責務は、単に鑑真の「伝記」を撰述すればそれでこと足りるというものではなく、「唐大和上」鑑真の「東征」の由来と顚末とを伝えるという点にもあったものと思われる。これは、元開自身もそのように構想したことであろうが、元開のもとにもたらされた、思託のいわゆる「広伝」その他の資料が、すでに通常のいわゆる伝記とは大いに異る内容のものであったからだと推測される。つまり、思託自身の構想が、すでに単なる鑑真の伝を叙する、というだけでなく、鑑真一行の渡東行の苦辛をつぶさに伝え、漂流した南海異域の見聞を詳細に報知せんとする意図に出るものであった、と考えようとするものである。その何よりの証は、現存の「広伝」逸文が、鑑真の伝記とは全く無関係な記事、例えば南岳衡山のたたずまいや、そこに修行した智者大師の説話などに多くの筆を費していることなどからも推察が可能であり(10)、またその自伝たる「延暦僧録　第一」所収の思託伝に、

…思託述和上行記。兼請淡海真人元開。述和上東行伝荅。則揚先徳。流芳後昆…

と述べているように、いわゆる「広伝」は撰者自身の称呼によると

「和上行記」であって、「和上伝」ではなかったのである。

思託のまとめていた三巻に及ぶ大部な「広伝」（前記のように、思託の自称によると「和上行記」であった）は、その逸文を収めた文献によって、

大唐伝戒師僧名記大和上鑑真伝（「聖徳太子平氏伝雑勘文」「顕戒論」など）

大唐伝戒師僧名記伝（「七代記」「聖徳太子伝暦」「上宮太子拾遺記」「太子伝古今目録抄」など）

大唐揚州龍興寺和上鑑真名記伝

唐招提寺大和上三巻伝

伝戒大師三巻伝

鑑真大和尚伝

大和尚伝（「東大寺要録」）

広伝（「梵網戒本疏日珠鈔」「華厳二種生死義」紙背）

などと称されているが、いずれもいわゆる「広伝」の異称で、同一のものと考えられ、しかもそれに対する撰述者自身の称呼は「和上行記」であった、という点は十分に注目せねばならないものであろう。この「和上行記」という呼称は、唐代中国における高僧の伝の一種にある

大唐故三蔵玄奘法師行状一巻（冥詳撰）

玄宗朝翻経三蔵善無畏贈鴻臚卿行状一巻（李華撰）

大唐故大徳贈司空大辨正広智不空三蔵行状一巻（趙遷撰）

大唐青龍寺三朝供奉大徳行状一巻（未詳）

などや、「文苑英華」巻九七一～巻九七七に収める多数の「行状」、あるいはさらにさかのぼって、「文選」巻六十に収める。

斉竟陵文宣王行状一首（任彦昇撰）

などに類似するもののように思われる。しかし、「行状」が比較的短章であるに対して、思託の「和上行記」は全三巻の大冊であったこと、「行状」はそれ自身一つの文体の称で「文選」などにも項目を立てられているが[11]、「行記」という文体はない（後に、わが円仁はその入唐求法の日記を「入唐求法巡礼行記」と称している）こと、「行状」は多くの場合、「謹状」「謹上」などの結句をもって結びしかるべき長上への呈上・奏上の形式をとっているが、「和上行記」にはそのような形跡はないこと、また「和上行記」は釈恵道の序まで付して体裁をととのえた単行の長篇であったらしいこと[12]、などの相違が指摘でき、この「行記」をもって、「行状」の意に用いたと考えることは、とうてい不可能とせねばならない。

しからば、この場合の「行記」は何を意味するものであろうか。私見によれば、この「行」は「東行」の意であり、「和上行記」はまさに「鑑真和上東行記」であったと考えるべきであると思われる。したがって、これを前記のように「大唐伝戒師僧名記大和上鑑真伝」以下に示したような呼称で呼ぶことは、形式的な総称としてはともかく、撰述者思託の意図したところからは大いにそれるものといわねばならない。また、これをもし略称で呼ぶとすれば、「広伝」ではなくして、「行記」とこそ呼ぶべきものであったのである（ここにはいたずらな混乱を避けて「広伝」と称しておく）。

思託は、鑑真が渡東行を決意した時以来、そのほとんどの期間を師鑑真と共に行動し、後になって自身の見聞や体験をもとにして、この「和上行記」三巻をものにしたにちがいない。

三

現存「東征伝」は、その撰述のための資料の大部分を、思託の三巻本「広伝」に仰ぎ、それを節略・彫琢して一巻にまとめたものであった。さきにも記したように、思託の「広伝」が、実は伝ではなくして、「行記」であったのだから、そこに記されていた内容は、鑑真に関する伝記的事項としては案外乏しいものであったのではないか、と想像される。

ところで、元開は「東征伝」撰述のころ（宝亀十年―779）には、齢五十八才、大学頭にして文章博士を兼ね、石上宅嗣と共に、当代の「文人之首」として、奈良朝末期文壇に君臨していた。そして、「日本後紀」延暦十六年二月己巳（十三日）の「続日本紀」撰修の上表文によると、

…前朝詔故中納言従三位石川朝臣名足、刑部卿従四位下淡海真人三船、刑部大輔従五位上当麻真人永嗣等、分帙修撰、以継前紀…

とあって、かつて「続日本紀」撰修のことに預ったことがあったのであった。もっとも、これについては、坂本太郎博士も次のごとく述べておられて、必ずしもその任を全うしたとはいえないのである。

…文武天皇元年から天平宝字元年までの六十一年間を記した曹案三十巻が早くから存在した。（中略）さて、この曹案の修正を、光仁天皇は石川名足・淡海三船・当麻永嗣の三人に命じた。ところが三人は旧案に因循して、はかばかしい修正を行なわず、宝字元年紀一巻を紛失するという失態まで演じて、二十九巻を上ったのである(13)。

ここで注目したいのは、「…三人は旧案に因循して、はかばかしい修正を行なわず…」といわれている点である。これを「日本後記」の続記上表文に徴せば、

…而因循旧案、竟无刊正、其所上者唯廿九巻而已…

とあって、三船が果してどの程度の仕事を分担したものか判然としないが、少くとも旧案すなわち三十巻からなる曹案にこだわって大鉈をふるうことをやらなかったもののごとくである。そして、この時の失敗は三船の胸中に深く留められたものと推測される。後になって元開（三船）が思託より委嘱されて三巻本「広伝」にもとづいて、一巻本「東征伝」を撰述する時、この教訓をもとにして、一方では三巻もの大冊を一巻に節略すべく、また一方では「続紀」撰修の折に経験した、史家として正史をまとめるという仕事（そのなかには必ずや薨卒伝をまとめるという仕事も含まれていたはずである）に苦慮するところ大なるものがあったと思われる。

かくて、「東征伝」は、鑑真一行の前後十一年に及ぶ辛苦の物語、特に漂流譚や伝道・伝戒のために不退の使命感をもって行動する鑑真の言行など、思託の手に出る部分がその主要部を形成し、その上に鑑真の伝記的事実、例えば姓氏や諱のことや出目など、あるいは渡日決意までの略歴、さらに渡日以後の略歴等々を付加して、今日みるごとき体裁に整備されたのは、文人にして史家でもあった元開の手によってであった。「東征伝」は、思託の「和上行記」から脱皮して、「唐大和上東征伝」の名称が示すごとく、「唐大和上」たる鑑真の「伝」であると同時に、その「東征」の道中顚末の記でもあるものに成長したのであった。そのいわば「鑑真東行説話」と称

してもよいような箇所の一つに、一行の大漂流のことを叙した迫力に富むドラマチックな場面がある。

十月六日晨朝、和上云、昨夜夢見三官人、一著緋、二著緑、於岸上拜別、知是国神相別也、疑是度必得渡海也、少時風起、指頂岸山発、東南見山至日中其山滅、知是蜃気也、去岸漸遠、風急波峻、水黒如墨、沸浪一透、如上高山、怒濤再至、似入深谷、人皆荒酔、但叫観音、舟人告曰、舟今欲没、有何所惜、即牽桟香篭欲抛、空中有声言、莫抛々々、即止、中夜時、舟人曰、莫怖、有四神王、著甲抱杖、一在舟頭、一在檣舳辺、衆人聞之、心裏稍安、三日過蚍海、其蚍長者一丈余、小者五尺余、色皆斑々、満泛海上、三日過飛魚海、白色飛魚翳満空中、長一尺許、五日經飛鳥海、鳥大如人、飛集舟上、舟重欲没、人以手推、鳥即銜手、（中略）　此海中忽有四隻金魚、長各一丈許、走繞舟四辺、（中略）　明日近岸、有四白魚来、引舟直泊舟浦、舟人把椀、競上岸頭覓水、過一小崗、便遇池水、清涼甘美、衆人争飲、各得飽満、後日更向池、欲汲水、昨日池處、但有陸地而不見池、衆共悲喜、知是神霊化出池也、（下略）

これについて、安藤更生氏は、

鑑真等、恐らく朱家島を求めてゐるうちに蜃気楼を認めてまことの島なりと思ひ、これに誤られて近づかうとしたため、気がついたときには外洋へ出てしまつたのであらう。

海水が墨のようになつたといふのは、琉球列島の北側に沿つて、支那東海の日本寄りを北上して対島海流となる黒潮に乗入れたものと認められる。

荒天下の航海に於いて船が沈没に瀕した時、深淵を覗くやうな絶望と、何とかして助かりたいといふ願望とは、異常な精神状態を喚起し、期せずして幻聴となる。舟人が空中の声を聴いたと信じても、あながちに之を虚誕なりとして却けさることは出来まい。

…『東征伝』の記事に対して、之に疑ひを挿み、引いては同書の史的信憑性をも疑ふ学者がある。文学博士辻善之助氏は、「聖徳太子慧思禅師後身説に関する疑」と題する論文に於て、

天宝七載発航の途中、舟頭と檣に四神王が立つたとか、大鳥が集つて、舟没せんとしたとか、四金魚四白魚が現はれたとかの話に至つては、荒唐無稽といふより外はない。この他、総じて話が誇大せられて書かれたやうに見える。かやうに考へて見ると、この伝記に見ゆる鑑真の事蹟は疑はしくなる。

と云つてをられる。これについて私は早く昭和四年の交に、その然ざる所以を説いたのであるが、今かさねて之を説くこととする。（中略）　死の恐怖の下に、異常な精神状態に置かれた船員が、幻覚に四天王を見ることはあり得る。それを宗教家たる思託が、現実に神王の降臨と信じたとしても何等の不思議はない。思託は自分の眼に見、耳に聞いた事をそのまま記したのであつて、これを他に目的ある作為とするのは、近人のさかしらだてに過ぎない。海員が迷信深いのは世界的に共通するところで、（中略）　空中の声も、（中略）　四天王も、素直に受取れば何の無理もない。凡そ史料を疑ふのは、真実を求めんがために疑ふのである。疑はんがために疑へば天下何物か疑ひを免れる

ことが出来ようか。

辻博士は、大鳥が集つて舟没せんとしたといふのは荒唐無稽だとのお言葉である。大鳥とはそもそも何であらうか。（中略）海鳥中、最大なるものはアホウドリである。アホウドリは、翼を拡げると翼端から翼端までは二メートル以上もあるものすらある。「大いさ人の如し」という言葉は決して誇張ではない。（中略）

四金魚・四白魚の問題も、四といふ数に囚れるから妙に聞えるが、南西諸島から南支那海にかけて、航海中、海豚や鮫類が船に随いて来ることは海軍士官や海員がしばしば経験するところで、殊に海豚は白い腹を翻して、船の行手に躍り出るところは、「船を引きて」といふ形容に適ふものがある。海の中で金色に光つて見える魚を「金魚」と書いたとて、金で出来た魚でもなければ、琉金・出目金の大きいのと考えなくとも宜しからう。さうすると、何処にも荒唐無稽はなくなつてしまつて、むしろ『東征伝』の記事は正確であるといふ証拠になる。私は、八世紀後半に書かれた書としては、むしろその著者の態度の現実的なのに敬意を表するものである。

蛇海について　この蛇はエラブウナギであらう。（中略）

海を飛ぶ魚がトビウオであることは説明を要しまい。（中略）

漂海中の記述は、よくこの辺り海洋の実状に適合するものであつて、『東征伝』の資料の正確にして信用すべきものであったことを覚えしめる。

と述べ、強い調子で辻善之助氏を叱責しておられる[15]。

確かに、辻氏のように、すべてを荒唐無稽の記述として読むのは問題があろうが、同時に、安藤氏のように、すべてを正確でリアルに描写されたものとして受取るのも、ひいきの引倒しというべきであろう。

私見によれば、辻氏は「東征伝」に正確且つ十分信頼のおける伝記及至史料たることを期待し要求されての読み方であったと思われ、安藤氏の場合はあまりにも敬虔主義的で、いわば尊厳な経典に接するような態度、あるいは高僧の尊い生涯に学ぼうというような態度からの、ややヒステリックな調子の辻氏批判になってしまったものと思われる。

はじめにも記したごとく、私は「東征伝」を文学として読もうと思うものである。したがって、このあたりの行文は、まさに文学的表現の横溢する、本書中の圧巻と称していい箇所であり、撰述者も最も力をこめて書いている箇所であると思う。史料でもなく、伝記でもなく、ましてや宗教書や経典の類ではないということを強調したく思うし、その上に後述のごとく、このような「東征伝」の世界は、実は先行する作品を念頭において書かれている、と考えるなら、安藤氏の感情的な「東征伝」擁護 ═ 辻氏攻撃は、徒労に近いものと称して過言ではあるまい。

四

さきに述べたように、「東征伝」は、思託の「広伝」にもとづいて撰述されたものである。前節に引用した箇所も、おそらく元開の手によって描かれたものではなく、実際に鑑真と行をともにした思託の手によって「広伝」に描かれていたものに相違あるまい。元開

はその思託の文章の詰屈聱牙を流暢華麗な文章にすべく彫琢を加える役割を果したのであった。思託はそれでは、己が鑑真に随行した時のことを、ありのままに描き上げていたのであろうか。――さきの辻・安藤両氏は、いずれも「東征伝」撰述者自身の手になる文章として、この箇所を批評されたものであったが、前記のように、この文章にもしもとづくものがあったとしたら、両氏の論争（尤も安藤氏の一方的攻撃だけであるが）は、ほとんどその意味を失なってしまうことになるであろう。

目加田さくを氏は、「東征伝」について、このあたりの文章をも引用しつつ、

…それは、大和上将来の仏典類の克明な記録と共に後の入唐求法僧の日記にうけつがれて行くスタイルである。数量を極度に制定（ママ）された大和上の将来仏典中に（中略）玄肆法師西域記十二巻が入っている事は興味深い事である。実は堅忍不抜の決心でなされた渡日そのものが、玄肆の天竺行と等質のものであったからであって、大和上東征伝が、必然的に玄肆西域記に倣った作品であることは論をまたないところである。

と述べておられる[16]。

「大唐西域記」十二巻、玄肆が不屈の精神で、天竺より経典多数を唐にもたらした西域紀行であり、目加田氏も述べておられるように、わが国へは鑑真もその来朝時（天平勝宝六年――754――）に将来している。しかし、実はそれより早く、天平十一年（739）の正倉院文書にもその名が見えていて[17]、天平時代にはすでにわが国に行なわれていたことが明らかである。「西域記」は、もともと唐太宗の勅命によって撰述されたもので、玄肆訳・弁機撰とされているが、玄肆自記の旅行記録にもとづいて、弁機が編述したものと考えられている。おそらく、思託の「広伝」執筆にあたっての姿勢は、目加田氏の指摘されたごとく、鑑真を「西域記」における玄肆にもなぞらえようと考えていたものと思われ、「和上行記」という書名にも、それは反映していると思われる。

ところで、いま「東征伝」本文と「西域記」本文とを比較してみると、予想に反して、両者の間はそれほどに密接なものとは思われない。例えば、前引の辻・安藤両氏などの注目された箇所などは、「東征伝」中の最もドラマチックな箇所で、当然「西域記」のなかに似かよった箇所があって然るべきと思われるが、見出すことが困難である。

玄肆の西域行を中心にして、その生涯を叙したものには、別に「大唐大慈恩寺三蔵法師伝」十巻がある。この書は、その序文によると、唐太宗の貞観末年に慧立が五巻本として撰しておいたものに、周垂拱四年（688）――わが持統二年――に至って、その弟子彦悰が増補して十巻本にしたものというが、前半には玄肆の西域行を叙し、後半には帰国後唐帝との間に交した文章（詔勅表啓の類）を中心として、玄肆の訳経事業を叙している。本書の渡来も、さきの「西域記」の場合と大略同じころと考へられ、その書名の初見は天平十一年(739)の正倉院文書で、天平期にはすでにわが国に行なわれていたものと推定される。なお、築島裕博士は、

この書が日本に伝へられたのは、撰述の垂拱四年(六八八)から、日本での初見天平十一年(七三九)七月までの約五十年間のうち何時かといふことになる。この間に遣唐使の帰朝した事蹟を見ると、養老二年(七一八)・天平六年(七三四)・天平八年(七三六)の三度であり、本書の渡来もこの三度のうちの何れかであったと考へる可能性が大きい。その中、天平六年には大使多治比真人広成と共に吉備真備・玄昉等が帰朝して居り、玄昉は経論章疏五千余巻幷に仏像等を将来し悉く太政官に献じたが、勅によりこれをすべて興福寺に蔵したといふ。この中に或いは「大慈恩寺三蔵法師伝」があつたかもしれない。玄昉は、入唐して智周に師事して法相を学したが、その智周は玄奘の高弟慈恩の弟子に当るわけであるから、本書を玄昉が尊重し将来したといふ可能性は少なくないであらう。

と、天平六年(734)玄昉の将来を推定しておられる[19]。

わが国での盛行はもちろんのことであるが、おそらく唐においても、「西域記」とならんで、僧俗の間に行なわれていたものであろう。あたかも本書撰述の垂拱四年(688)は、鑑真誕生の年に当り、若き日の鑑真自身も、幾度か本書を繙いて感奮したであろうと思われ、その弟子思託ももちろん在唐時から本書には親しみ、師鑑真の渡東行をひそかに玄奘の西域行になぞらえていたのではないかと思われる。

「東征伝」は一巻、「慈恩伝」(以下、「大唐大慈恩寺三蔵法師伝」をかく称する)は十巻もの大部なもので、とうてい両者を対等に比較することは不可能であるが、両者における全体的構成——その出目から説き起こして父のことに及び、出家に際してのエピソードを配して学統を叙し、いよいよ苦難の西域行あるいは渡東行を決意して行動にうつす順序は、まことによく照応しているということができる。また、西域行・渡東行の途中での難行苦行の数多のなかに、両者の遭遇事件の非常によく似たものが一再ならず見出され、場合によっては、次に示す諸例のごとく、その行文まで酷似するものがあって、「東征伝」は明らかに「慈恩伝」に学ぶところ大であった、と称してよいように思われるものがある。

慈恩伝	東征伝
玄奘此行不求財利、無冀名誉、但為無上正法耳、(巻一)	和上曰、是為法事也、何惜身命、諸人不去、我即去耳、
次有精舎、舎中有如来所履石、石上有仏雙跡、長一尺八寸、広六寸、両足下有千輻輪相、十指端有萬字花文及瓶魚等、皎然明著、(巻三)	其鄭山東南嶺石上有仏右跡、東北小巖上復有仏左跡、並長一尺四寸、前濶五寸八分、後濶四寸半、深三寸、千輻輪相、魚印文分明顕示、
其山険峭峻極于天、自開闢已来氷雪所聚、……風雪雑飛、雖複屦裘不免寒戦、(巻二)(その他飛雪に苦しむ状多し)	明日斎後踰山、嶺峻途遠、日暮夜暗、澗水没膝、飛雪迷眼、諸人泣涙、同受寒苦、

阿耆尼王与諸臣来迎延入供養、…王与群臣及大徳僧木叉鞠多等来迎自外諸僧数千、（巻二）（その他この類多し）

法師初覩謂為賊衆、漸近見滅乃知妖鬼、又聞空中声言、勿怖勿怖由此稍安、（巻一）

天欲明法師喚令起、取水澡漱解斎訖欲発（巻一）、…僧曰、汝等欲得水者、宜各礼仏受三帰五戒、我為汝等登崖作水…吾上崖後汝等当喚阿父師為我下水、任須多少言之、其去少時衆人如教而請、須臾水下充足、（巻二）

即以其夜鶏鳴時、到王城、門司啓王、王勅開門、法師入城、王与侍人前後列燭、自出宮迎法師入後院坐一重閣宝帳中、拝問甚厚、云弟子自聞師名喜忘寝食、量准塗路知師今夜必至、与妻子皆未眠読経敬待、須与王妃共数十侍女又来礼拝、（巻一）

彫蹄鼻飲之俗、卉服左衽之人、（巻六）

至発日王給手力駝馬、与道俗等、傾都送出、（巻二）

発日王与諸僧大臣百姓等傾都送出城西、王抱法師慟哭、道俗皆悲、傷離之声振動郊邑、（巻一）

令燉煌官司於流沙迎接（巻五）

刺西京留守左僕射梁国公房玄齢、使有司迎待、法師承上欲問罪遼瀋、恐稽緩不及、乃倍途而進、奄至漕上、宮司不知迎接威儀莫暇陳設、（巻五）

至八日有弟子高昌僧玄覚、夢入宅内、設斎供養、又於大守廳内、設会受戒、

人皆彫蹄鑿齒、繡面鼻飲、是其異也、

官人僧道人僧道父老迎送礼拝、供養承事、其事無量、不可言記、

時馮都督来、親送和上、自扶上船、口云、古璞与和上終至彌勒天宮相見、悲泣而別去、

四日、入京、勅遣正四位下安宿王、

後勅使正四位下吉備朝臣真備来、口詔曰、大徳和上遠渉滄波、来投此国、誠副朕意、喜慰無喻、

宝字七年（癸卯）春、弟子僧

和尚所至縣州官人、参迎礼拝歓喜、

舟人告曰、舟今欲没、有何所惜、即牽桟香篭欲抛、空中有声言、莫抛々々、即止、

請檀越早取水来、時彼官人喚両个老人、処分云、汝等大了事人、急送水来、夢相如是、水応今至、諸人急須把椀待、衆人聞此、惣歓喜、

其別駕馮崇債、遣兵四百余人来迎、引至州城、別駕来迎、乃云、弟子早知和上来、昨夜夢有僧、姓豊田、当是債舅、　此間有姓豊田者否、衆僧皆云、無也、債曰、此間雖無姓豊田人、而今和上即将当弟子之舅、即迎

見有一浮図端厳高大忽然崩倒、見已驚起告法師、法師曰、非汝身事、此是吾滅謝之徴、（巻十）

少間神逝、侍人不覚属紘方知、従足向上漸冷最後頂暖、顔色赤白怡悦勝常、過七七日竟無改変、亦無異気自非定慧荘厳戒香資被、（巻十）

忍基夢見構堂棟梁推折、寤而驚懼、知大和上遷化之相也、

是歳五月六日、結跏趺坐、面西而化、春秋七十七、化後三日、頂上猶煖、由是久不殯殮、至於闍維、香気満山、

「慈恩伝」は（「大正蔵経」第五十巻所収の本文に、「東征伝」は「寧楽遺文」下巻所収の本文（一部他本より訂正）に、それぞれよった。

右に示したのは、両者の行文の比較的よく似た箇所を、適当に捨い出してみたのであるが、右以外にも、部分的な語句、特に異土の風物を綴る過程で出てくる品物名に至っては、そのほとんどのものが、「東征伝」にあれば「慈恩伝」にも見出すことができる、といった態を呈していて、両者の関係の浅からぬものを十分に感ぜしめる。また、全体の構成からいっても、

出自――父のこと――出家のときの逸話――西域行渡東行出発――苦難――夢のこと――渇――異国風物――雪山越え――王候迎接――仏足跡のこと――王候僧俗との別離――帰還来日――勅使迎接――弟子の夢――遷化――頂煖、

と、あまりにその構成は符合する箇所が多い。

さきに示したように、目加田さくを氏は、「東征伝」が学んだのは「西域記」であるとされたが、両者を比較しても、その形跡を認めることは甚だ困難である。「西域記」は、玄奘の伝ではなくして、文字どおり、「西域の記」であり西域紀行であって、その出自とか学業とか、あるいは帰還後のことなどは、当然記されてはいない。もちろん、「広伝」「東征伝」の撰者たちも、「西域記」からある程度のヒントとか示唆の類は得たものと考えられるが、それを「西域記」のなかに具体的に指摘することは不可能である。

「東征伝」が形式の上からも内容の上からも直接的に学んだものとしては、やはり「慈恩伝」を上げるべきであろう。

五

「東征伝」の記述は、すべて荒唐無稽の創作であるか、それとも実際の体験をありのままに記録したものであるか。　さきの辻・安藤両氏の論争は、煎じつめればこのように称することができるであろう。ところが、前述のごとく「東征伝」の目ざしたところは、「慈恩伝」に対抗して、玄奘三蔵にも比せらるべき鑑真の渡東行を叙する点にあった。したがって、その世界は「慈恩伝」（このなかには当然のことながら、「西域記」の世界が溶融している）の世界に極めて近接したものとなり、一見無稽としか思われないような、大袈裟な、あるいは神怪じみた表現がなされたものと思われる。しかしながら、これは「西域記」がすでに備えていたもので、それが「慈恩伝」に流入し、「東征伝」はそこから得たものであった、と解すべきである。

「西域記」はその神怪的、伝奇的要素を含むが故に、一方で当時

の西域諸国の事情を知る上での貴重な資料であると同時に、後世の文学（「玄奘取経説話」や「西遊記」など）に発展・展開して行く余地を所有していたのである。その意味では、「西域記」自身すでに文学としての要素を内包していたと称すべきであろう。そして、わが「東征伝」の世界は「西域記」における文学性と同等の、あるいはそれ以上の文学性を指向しつつ撰述されたのであった。したがって、この面からもさきの安藤氏の辻氏攻撃は、無意味なもので、氏自身辻氏攻撃に急なるあまり、「東征伝」を文学として、あるいは文学的表現として読む柔軟な態度を、失ってしまわれたものと思われる。「東征伝」の撰述者は、「慈恩伝」の世界におけると同様に、神怪・伝奇の世界を創り上げようとしているのであって、それを無理やりに合理的に解釈しようとしたり、逆に不合理として非難したりするのは、撰述者の意図からそれるものというべきである。

以上のごとく見来るとき、「東征伝」の世界は、単に鑑真の伝記を忠実に叙しただけのものではなく、また渡東行のいわゆる紀行だけを目的として撰述されたものでもなく、幾多の苦難に耐えて宗教的使命を達成した玄奘三蔵の再来、という意識の下に、「伝」の世界と「渡東行」の世界の両者を混融せしめる意図をもって形成されたものというべきであろう。「東征伝」は、かくして、単なる高僧伝をはるかにぬきんでて、奈良朝末期としてはかなりな程度に、その文学的達成を遂げたのであった。

注

(1)向達「鑑真和上円寂一千二百年記念への献辞」（『鑑真和上　円寂一二〇〇年記念』　春秋社　昭和三十八年十一月刊　所収）　大塚浄氏の訳文による。

(2)宮川寅雄「鑑真和上在日の時代」（(1)の書所収）

(3)　例えば、

唐の鑑真和上（688～763）（律宗では和尚を和上と書く）が渡航して日本に来る旅行記を中心に書いた個人の伝記。（中略）本書は海南島、広西、広東等中国各地の記事が多く、日本における旅行文学としては規模の大きいものである。また、日支交通史上貴重な資料であり、仏教伝播の具体的な資料としても興味ある文献である。また、本書は淡海三船によって書かれ、巻末に思託、石上宅嗣、藤原刷雄、唐使高鶴林の詩七首を載せており、日本漢文学史上大切な資料である。（水野弘元監修「新・仏典解題事典」春秋社　1966・9刊）

のごとく、「旅行記を中心に書いた個人の伝記」「日本における旅行文学」等々の発言も見られるが、この場合も、結論的には「日支交通史上の貴重な資料」「仏教伝播の具体的な資料」ということに落着いているようである。

(4)坂本太郎「六国史と伝記」（『日本古代史の基礎的研究　上　文献篇』東大出版会　1964・5月刊　所収）

(5)今井源衛「漢文伝の世界」（『王朝文学の研究』　角川書店　昭和四十五年十月刊　所収）参照。

(6)林陸朗氏は、

薨卒伝というのは、本書（続紀をさす）中に親王・王臣・僧侶等の死歿記事の次に、その人物の出自や祖父・父等の係累、本人の略歴、性格や特長、あるいは特別な功労や徳行などの特殊記事、さらには薨卒年齢などを掲げているものを指す。

と述べられ、また今井源衛氏も、

大体基本的な薨卒伝記の形式は（中略）官位氏姓名・出自（父・時には祖父まで遡る）・性格・宮歴・薨時年齢、の五項目がその基本的骨格なのであり、その中でも不可欠のものは、官位氏姓名と宮歴とであり、他のものは出自・薨時年齢がこれにつぎ、性格は記述用例数の大小から判断して、やや二義的なものであろう。そして、（中略）逸話や（中略）賞讃や詠嘆の辞に見える記録者自身の主観的表白の類はさらに付属的なものとみてよいと思われる。しかもこの逸話的要素は六国史の中でも時代が下るに随って増大し、時には数段にわたって生涯の幾つかの逸話を綴る場合（中略）があり、その中には奇怪な伝説的記事の見えることも少なくないのである。また、それに随って記録者の主観的表白も、（中略）賞讃ばかりでなく、（中略）しばしば痛烈な批判や攻撃にも用いられる。

と述べておられる。

林陸朗「『続日本紀』掲載の伝記について」（『日本史籍論集　上巻』吉川弘文館　昭和四十四年十月刊　所収）

今井源衛「在原業平」（『王朝文学の研究』　角川書店　昭和四十五年十月刊　所収）

(7) 注(4)に同じ。

(8) 拙稿「『唐大和上東征伝』の方法　思託撰三巻本『広伝』から元開撰一巻本『東征伝』へ　」（「国語と国文学」四五ノ一一）

(9) 拙稿「『唐大和上東征伝』の成立と付載の詩」（「水門」第九号　昭和四十二年八月刊）

(10) 注(8)に同じ。

(11) 「文選」巻六十所収の「斉竟陵文宣王行状」には、六臣注として「良日述其徳行之状」と見えている。

(12) 注(8)に同じ。

(13) 坂本太郎『六国史』（吉川弘文館　昭和四十五年十一月刊）

(14) 観智院甲本によったという『寧楽遺文』下巻所収の本文による。以下「東征伝」の引用はすべてこの本文による。

(15) 安藤更生『鑑真大和上伝之研究』（平凡社　昭和三十五年八月刊）P.200～206の註一〇～註二三。なお、同氏著『鑑真』（吉川弘文館　昭和四十二年一〇月刊）にも同一趣旨の辻博士非難が次のごとく見える。

…私は以上、鑑真の海難の様子を思託の記事によって略叙したのだが、故辻善之助博士などはこの記事を神怪に過ぎるとして大いに疑い、思託の作為であると断定されたが、実はこれは思託の体験なのであって、恐らく思託はこうした海を経、いろいろな動物に出遭ったのだが、ただその解釈が、少しく神異に傾いたのと、この思託の記事を批判した現代の学者たちに、支那東海の実際に対する知識を欠いていたために思託の作為なりと速断されてしまったのだろう。

（下略）

(16) 目加田さくを『物語作家圏の研究』（武蔵野書院　昭和三十九年七月刊）

(17) 石田茂作『写経より見たる奈良朝仏教の研究』（東洋文庫、昭和四十一年七月再刊）所収「奈良朝現在一切経疏目録」による。

(18) 注(17)に同じ。

(19) 築島裕『興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝古点の国語学的研究　訳文篇』解説P.10。（東大出版会　一九六五年三月刊）。

（くらなか　すすむ・神戸市立外国語大学）